

視写となぞりが文字学習に及ぼす影響

○佐郷香菜子・沖林洋平
(山口大学教育学部)

目的

幼児・児童における書字技能の習得において、視写練習のなぞり練習に対する優位性効果が示されている(小野瀬, 1987)。また、大学生における漢字の書き取りにおいて、書字学習法が「書くことのできない、未学習の漢字」の学習に対して有効であることが示されている(稲垣・藤田, 2005)。本研究では、視写練習を行った群の方が、なぞり練習を行った群よりも、学習した未知の漢字の正再生率・再認率がともに高くなり、虚再認率が低くなると予想し、検証した。

方法

実験時期 本研究の実験は、2025年に実施された。

実験参加者 本研究の実験参加者は、大学生45名(データ取得方法に不備があった9名を含む)、大学院生5名(データ取得方法に不備があった2名を含む)であった。

質問項目 1. 性別 2. 年齢 3. 学部・選修(課程・コース) 4. 取得済み漢検の級 5. 教科書や専門書、論文に関して、読書をする頻度 6. 1日あたりの平均読書時間(本、雑誌、新聞など) 7. 1日あたりの平均SNS投稿回数 8. 学期中1週間あたりの平均レポート提出件数 9. ノートを使って講義記録をとる習慣の有無 10. 日記を書く習慣の有無 11. 家庭教師や塾講師のアルバイトをしているか

手続き 参加者に実験用紙を配布し、視写およびなぞりによる漢字の学習、再生テスト、再認テストを行った。1. 5分間で前述の質問項目に答えた。2. 15分間で漢検1級から準1級に該当する漢字20語において、視写またはなぞり練習課題を行う。3. 3分間、視写したまたはなぞった漢字の自由再生テストを行った。4. 制限時間は設けず、偽漢字を含む28語において、再認テストを行った。

結果と考察

練習方法ごとのサンプル数は視写練習が19、なぞり練習が20であった。各群の正再生率、再認hit率、虚再認率の平均値と標準偏差をTable1に示す。

Table1

各群の正再生率, 再認 hit 率, 虚再認率, 修正再認率				
	正再生	hit	虚再認	修正再認
視写	.39(.08)	.48(.19)	.63(.13)	.29(.27)
なぞり	.23(.13)	.41(.13)	.73(.22)	.19(.22)

カッコ内は標準偏差

視写群となぞり群の正再生率、再認 hit 率、および虚再認率をそれぞれ対応なし t 検定で比較した。その結果を Figure1 に示す。

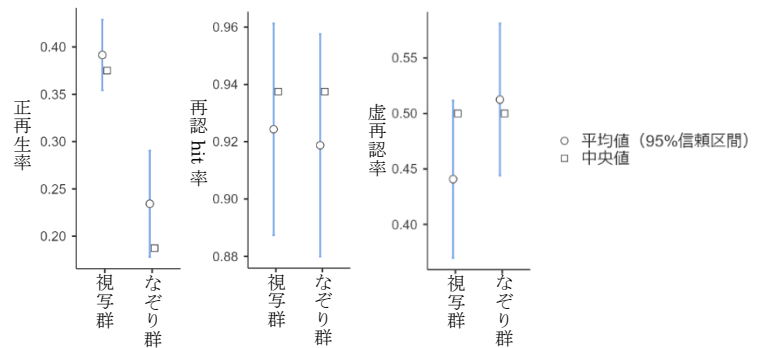


Figure1 各群の正再生率、再認 hit 率、虚再認率の t 検定の結果

t 検定の結果、視写群の方が正再生率は有意に高く($t(37) = 4.52, p < .001, d = 1.45$)、一般化線形モデルの結果、正再生率が高くなると虚再認率が低くなる傾向が示されたが有意ではなかった(推定値 $= -0.89, SE = 0.69, 95\%$ 下限 $= 0.10, 95\%$ 上限 $= 1.69, p = .210; AIC = 6.58$)。対応なし t 検定の結果、再認 hit 率には群間で有意な差は見られなかった($t(37) = .204, ns = .839, d = .0654$)。本研究では、一般化線形モデルの結果、視写群では正再生率が低いと虚再認率が高く、正再生率が高いと虚再認率は低くなるという結果を得た(推定値 $= -0.89, SE = 0.69, 95\%$ 下限 $= 0.10, 95\%$ 上限 $= 1.69, p = .210; AIC = 6.58$)。漢字学習において、なぞり練習よりも視写練習をした方が、学習効果が高くなることが示された。

また本研究では、練習方法にかかわらず、練習が丁寧に行われていれば虚再認率が高くても正再生率は高いまま維持されるということが示唆された。